

近世哲学研究

第 21 号

熟慮に基づく相対性 — 田中 一馬 1
——バーナード・ウィリアムズの相対主義説——

二つの闇夜 — 浅沼 光樹 17
——西谷啓治のシェリング解釈（一）——

2017

近世哲学会

編集後記

なによりもまず、今号にご寄稿いただいた方々、貴重な時間を費やして編集・発送に当たられた方々に篤くお礼を申し上げます。地味な本誌の存在意義をお認めいただき、お力添えを頂いたみなさまには感謝あるのみである。

筆者が編集後記の筆をとるのは今回が最後である。この機会に本誌のような学術誌の将来について感想を記すことにしたいと思う。オンライン化の流れが急である。学会誌にもオンライン移行を決めたところがある。ネットでダウンロードできるものだけが業績であるという考えが現れているという話も聞いた。どこでも財政難が常態の昨今だ。予算項目として最も目立つ機関誌刊行費用がまず目をつけられるのは仕方ない。確かに経費の節約、編集労力の軽減といったことから考えると、オンラインに移行するという案は賛成を得やすいものだろう。実質的には変わらない形で安価に代替することができると言われれば、なおさらである。紙媒体を失うことのデメリットは何だろうか。私自身の経験からすると、結局は「読まなく（読まれなく）なってしまふ」ことではないか、と感じる。つまり必要なものをダウンロードする、しかもあらかじめキーワードで検索してヒットしたものだけを対象として、というやり方は目的合理的ではあるが、一冊の紙媒体になっていった時に比べると、「ついでにいろいろと読む」という経験がしにくくなることをはじめとし

て、どこか薄っぺらになってしまふようだ。実際オンライン化で縁が切れてしまった雑誌がいくつかある。

このごろレコードが復活していると聞か、コンパクト・ディスクが出たときには、レコードは楽音以外のノイズが多すぎるし、人間の耳には聞き取れない余計なものまで入れてしまっているのに対し、ディスクには必要なものだけが入っているのだ、という話であった。ところが今やディスクでカットされてしまった部分こそが音の体験を豊かにするものだ、と説かれているのである。紙媒体の「雑誌」でなくなるこれがこれと似たような結果にならないければ幸いである。

思い出は記憶とは違うというのが私の考えである。いっさいの係留索がほどけ生の連関から解き放たれてばかりと単体で浮かび上がってきたものだけが思い出だと思ふ。記憶が生きたことの副産物であるとする、思い出はそれが本当のものであるならむしろそれぞれが小さな死の結果である。だから思い出が増えることは私においてなにかが増えるのではなく、むしろ私の消滅あるいは解体のインディケータである。結構いろんなことがあつたのにこの21年間のことはまだ記憶でしかない。順序も軽重も上下もなくなった思い出が私を埋め尽くしたときが私の死である。

ネット空間に遠近感なく単体で浮遊しつつランダムに抽出されることを待つ形態に移行した「論文」がもたらすのははたして何であろうか。注視していたいと思ふ。

(F)

『近世哲学研究』（既刊目次）

第一号（二九九四）

祝辞 酒井 修
ハイデッガーにおいて哲学を 田中 敦
—— 現存在の現象学的存在論考究 ——
カントと初期フイヒテとの接点 北岡 武司

義務論としてのカント倫理学 蔵田 伸雄
—— 功利主義との対比 ——
対象と反省 山脇 雅夫
—— ヘーゲルの矛盾概念の理解のために ——

第二号（二九九五）

カント哲学における「経験」概念について 福谷 茂
—— 「世界」概念導入のための
端緒として ——

ヘーゲルのコルポラツイオン論 早瀬 明

—— 市民社会の団体主義的変革に向けた
ヘーゲルの試み ——

工学はどういうタイプの学問か

信仰の情熱とその逆説 田中 一馬
—— キェルケゴール『おそれとおののき』
におけるアブラハム解釈をめぐって ——

ハイデッガーのヘーゲル解釈 橋本 武志
—— 意識の二義性と意識の転換 ——

第三号（二九九六）

『全知識学の基礎』の到達点 子野日俊夫
読書人世界から学者共和国制度へ 福田喜一郎
—— 理性を制度化しようとした
カントの試み ——

デカルトにおける愛の区別について

未済の人倫 石田あゆみ
—— 『精神の現象学』主一奴論の一解釈 ——

ガダマーのデイルタイ批判 折橋 康雄

—— 『真理と方法』を中心に ——

第四号（二九九七）

一本の綱 (Sei) としての人間 吉川 康夫
—— ニヒリズム状況下に於ける
人間と社会の問題 ——

デカルトの懐疑について 安藤 正人
—— 『省察』の「反論と答弁」を
資料として ——

市民と国家の媒介 小川 清次

—— 「国民」形成の二側面 ——
『存在と時間』に於ける可能性概念の
多義性について 橋本 武志
自然主義的存在論の隘路 次田 憲和
—— フッサールの「領域的存在論」における
超越論的構成の「自己関係的構造」 ——

第五号（二九九八）

「常に誤る」と「時々誤る」 武藤 整司
—— デカルト的行論の一考察 ——

デイルタイに於ける客観的精神の概念
について
折橋 康雄

ハイデガーの他者論
安部 浩

第六号 (一九九九)

デカルトにおける『真理』と『存在』
倉田 隆

——明晰かつ判明に知得されるもの——
ヘーゲルの根拠論
山脇 雅夫

——知と存在との相即——
「第五省察」の隠された論理
次田 憲和

——「他者構成論」理解のための一視座——
シエリング哲学の出発点
浅沼 光樹

——人間の理性の起源と歴史の構成——
自由の軌跡
北岡 武司

第七号 (二〇〇〇)

——菌田 坦教授 退官記念号——
菌田 坦教授 略歴・業績一覽
菌田 坦

《講演》
近世哲学における神の問題
菌田 坦

近世哲学とはなににか
福谷 茂

——新しい哲学史像のために——
人間の輪郭
武藤 整司

——その曖昧さを擁護するために——
知の自己吟味
山脇 雅夫

——『精神の現象学』緒論における
知と即自の区別について——
ハイデッガーの良心論再考
橋本 武志

——可能性概念を手がかりに——
生と音楽
折橋 康雄

——デイルタイに於ける
生と音楽の時間性の問題をめぐって——
自由の軌跡
北岡 武司

第八号 (二〇〇一)

——批判哲学における
自由の可能性の意味——
認識か解釈か
福谷 茂

——新しい哲学史像のために (二)——
G・ハーマン相対主義説の論理
田中 一馬

歴史的理性の生成
浅沼 光樹

——シエリング『悪の起源』における
神話解釈の意義——
《書評》
北岡武司著『カントと形而上学―物自体と
自由をめぐって』
橋本 武志

N・ケンブ・スミス著(山本冬樹訳)『カン
ト』純粋理性批判』註解』
長田 蔵人

第九号 (二〇〇二)

『存在と時間』と哲学の方法(形式的挙示
再考)
田中 敦

フッサールにおける他者経験の構造と発生
榎原 哲也

ワイトゲンシュタインの「規則に従う」論
の若干の考察
子野日俊夫

復古のもとでの立憲主義
竹島あゆみ

——ヘーゲル法哲学講義(ベルリン
一八一九/二〇年)の二つの講義録——
《書評》
ヤーコプ・ペーメ著(菌田坦訳)『アウロー
ラー明け初める東天の紅』
福谷 茂

第一〇号 (二〇〇三)

十年の歩みを顧みて

菌田 坦

デカルトと自覚の問題

実川 敏夫

——コギトの弁証法性——

アレゴリーの復権をめぐる

高田 珠樹

——ガダマーとポール・ド・マン——

行為の規範としての礼節 (decorum) の意義

福田喜一郎

——クリスチャン・トマージウスにおける

法・道徳・礼節の区別——

格率とその「枠組み」

西川小百合

——カントの道徳判断論の

新しい理解を目指して——

《書評》

福居 純著『デカルト研究』

浅沼 光樹

第一一号 (二〇〇四)

カントにおける崇高の経験

牧野 英二

イデオロギー批判の技術哲学

橋本 武志

——マルクーゼ・ハーバーマス論争を

手掛かりに——

感性の弁護 (Apologie für die Sinnlichkeit)

とは何か

長田 蔵人

——カントの「直観」概念の

見過ごされたアスペクト——

『純粹理性批判』の反実在論的解釈

——その内実と意義——

千葉 清史

《書評》

武藤整司著『人間の輪郭——共生への理念』

吉川 康夫

第一二号 (二〇〇五)

形而上学的認識と超越論的認識

大橋容一郎

——カントと認識の形而上学・序論——

「この私」はなぜ謎を呼び起こすのか

沖永 荘八

——私に付属する性質が消去された

視点からの考察——

反現象学の道

次田 憲和

——フランク・ブレンターノにおける非超越

論的現象学と個体主義的存在論に基づく

直接実在論的認識論について——

超越論的反省とは何か

佐藤 慶太

——「反省概念の二義性」章の

三段構造とその意味——

第一三号 (二〇〇六)

根拠律批判から理性批判へ

石川 文康

——「ア・プリオリな総合」の

起源をめぐる——

シヨールペンハウアーにおける「物自体とし

ての意志」概念の導入

多田 光宏

——意志の否定と道徳の両立のために——

《書評》

三つの『純粹理性批判』新訳

佐藤 慶太

第一四号 (二〇一〇)

ヒュームの認識論についての覚え書き

小林 道夫

第二〇号 (二〇一六)

—— 菌田 坦名譽教授 追悼号 ——

菌田 坦名譽教授 略歴・業績一覽

—— デカルトの認識論との対比において ——
ライプニッツの創造論 (一) 福谷 茂
無制約者と知的直観 (二) 浅沼 光樹

承認と和解 竹島あゆみ
—— ヘーゲル社会哲学の二つの原理 ——

—— 『アイマイオス註解』から
『自我論』へ ——

ライプニッツの創造論 (二) 福谷 茂

エックハルトにおける“Grund”の問題 菌田 坦
ヘーゲルにおける現実と主体 山脇 雅夫

第一五号 (二〇一一)

第一八号 (二〇一四)

ヘーゲルにおけるセクシユアリティ 竹島あゆみ

意志の無限後退論 久呉 高之

二世界解釈と二側面解釈 千葉 清史
—— そもそも何が問題だったのか? ——

—— ライルと意志理論 ——
歴史・時間・事実 福谷 茂

—— 愛、快楽と必然性 ——
神経と宇宙 次田 憲和

—— 哲学史研究のための予備的考察 ——
無制約者と知的直観 (二) 浅沼 光樹

京都学派の哲学史的洞察 浅沼 光樹
—— 西谷啓治の卒業論文「シェリングの絶対的觀念論とベルグソンの純粹持續」について ——

—— 『アイマイオス註解』から
『自我論』へ ——

—— 『自我論』へ ——

第一六号 (二〇一一)

第一九号 (二〇一五)

Realität の二義性 檜垣 良成
—— 中世から近世へと至る
哲学史の一断面 ——

カント倫理学における「方法の逆説」と人権の問題 御子柴 善之

—— 最高に厳肅な字」の再興 ——
実存主義再考 安倍 浩

—— 『自我論』へ ——

福田 喜一郎

編集委員会

委員長

委員

林 福谷

太田 拓也

匡洋 茂

執筆者紹介

田中 一馬 島根大学准教授
浅沼 光樹 京都大学非常勤講師

(執筆順)

近世哲学研究 第21号

2018年3月25日 発行

編集・発行 近世哲学会
編集代表 福谷 茂
〒606-8501 京都市左京区吉田本町
京都大学文学部
西洋近世哲学史研究室内
<http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/modephil/>
TEL (075) 753-2444

定価 1200 円 (本体 1143 円)

STUDIES
in
MODERN PHILOSOPHY

No. 21

- Kazuma TANAKA : Relativity based on Deliberation 1
—— Bernald Williams's Theory of Ethical Relativism ——
- Kouki ASANUMA : Die Nacht der absoluten Identität 17
—— Die Bedeutung von Nishitanis Schelling-Deutung ——

2017

Published by
Society for the Researches
in the History of Modern Philosophy